

室町幕府の地方支配と地域権力
(要旨)

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D083182
氏名：市川 裕士

本論文では、室町幕府の地方支配について、具体的には領主間紛争を初めとする地域の問題に幕府がどのように対応したのかという点について、守護、国人という地域権力の動向をふまえつつ考察することで、室町幕府体制下における政治的安定がどのように実現していたのかという点を明らかにすることを図った。

まず、序論では、室町幕府の地方支配と地域権力に関する研究課題を整理するとともに、本論文の研究視角について述べた。

第一部では「南北朝・室町期における室町幕府の地方支配と地域権力」と題し、南北朝動乱勃発後、応仁・文明の乱勃発までの時期を取り上げ、室町幕府の地方支配について考察した。

第一章では「南北朝・室町初期における室町幕府の地方支配と地域権力」と題し、室町幕府体制の成立期ともいうべき、南北朝・室町初期における幕府の地方支配について考察した。南北朝期において、幕府は、反幕府方勢力との戦闘を展開するため、守護の権限を大幅に拡大する、いわば「分権化」ともいうべき政策を実施しているが、この「分権化」政策は守護の勢力を拡大させることとなり、将軍尊氏・義詮期や義満幼少期においては、有力守護の対立という政治問題を将軍が解決することができなかった事例がみられる。そして、地域権力に対する室町殿の絶対性・優位性が確立したのは義満親政期であったと考えられる。すなわち、義満親政期においては室町殿の権力を強化し、守護の自立化を抑止する動きがみられるが、このような動きは、「戦時」体制から「平時」体制への移行を目的として行われたものであったと位置付けられ、幕府は、室町殿の上意を中心に紛争を解決することで、政治的安定の実現を図ったのである。

次に、第二章では、「応永・永享年間における室町幕府の地方支配と地域権力」と題し、室町幕府体制の安定期ともいうべき応永・永享年間における幕府の地方支配について、『満濟准后日記』を取り上げ考察した。当該期において、地域権力から紛争への対応を求められた幕府は、室町殿の上意によって紛争に対応する方針を決定し、上意によって地域の問題を解決することで「無為」の実現を図っており、この点が幕府の地方支配の基本方針であったとみられる。また、このような基本方針の下で、幕府は、守護を基本としつつも、守護代、国人という多様な勢力を通じて上意を執行しており、幕府の地方支配は、これら地域権力が室町殿の上意を実行する地方支配の担い手として行動することで実現している。そして、当該期においては室町殿の上意による紛争解決能力に対する諸権力の信任が存在しており、幕府は、上意に対する信任を維持することで、全国支配を安定的に展開するこ

とを図ったのである。

第三章では、「嘉吉の乱後の室町幕府の地方支配と地域権力」と題し、嘉吉の乱後の幕府の地方支配について考察した。嘉吉の乱後、室町殿不在により幕府の地方支配が動揺する中で、守護・国人は地域において幕命に従わず、主体的に行動し、実力により勢力を拡大することを図っており、地域権力の自立化が進行している。また、守護・国人は、守護による分国支配の強化や、国人間の連携などにより自立的な地域秩序を形成し、幕命を相対化することを図っており、地域権力の自立化に向けての動きは、地域の実情に応じて様々なあり方がみられる。そして、地域権力が主体的に地域の問題を解決することを目指す中で、幕府による紛争解決が求められる事例は、有力な地域権力間の紛争をはじめとして自立的な地域秩序では解決することができない問題に限られていくこととなったと考えられる。

これまで述べたように、幕府は、室町殿の上意によって紛争を解決することで政治的安定の実現を図っているが、幕府の地方支配は地域の多様な実情や政治課題の差異に応じて様々なあり方がみられるのである。

第二部では、「守護山名氏の分国支配と同族連合体制」と題し、守護山名氏の権力構造について考察した。

まず、第一章では「南北朝動乱と山名氏」と題し、南北朝期における山名氏の政治動向と惣庶関係について、分国支配機構や被官層の動向、さらには当該期の政治情勢との関係をふまえて考察した。南北朝期において山名氏は、惣領時氏の下で関東を出自とする被官を通じて惣領が一族を統制するという同族連合体制の原型ともいえるべき体制を創り出したとみられるが、この体制は幕府や国人・被官との関係により様々な影響を受ける中で動揺しており、一族間の対立や被官層の軋轢を背景として明德の乱が勃発し、山名氏の分国は大幅に削減されている。

第二章では、「安芸守護山名氏の分国支配と地域社会」と題し、山名氏の安芸支配について考察した。山名氏は、幕命を背景として奉公衆を含む国人との関係を形成することで、安芸支配の展開を図ったが、守護と地域社会の関係は、政治情勢に応じて差異がみられる。すなわち、室町前期の安芸において、幕府は山名氏を通じて地方支配を展開しているが、室町後期の安芸についてみると、山名氏が大内氏対策の担い手として適さない状況下で、細川方の有力国人が幕府から地方支配の担い手としての政治的役割を求められ行動している。ここから、室町期における幕府の安芸支配の担い手について守護に限定されていたと理解することはできないが、守護山名氏は、安芸国人から所領問題への対応を求められて

おり、地域社会の秩序維持の担い手として重要な役割を果たしていたのである。

第三章では、「室町期における山名氏の同族連合体制」と題し、室町期における山名氏の政治動向と惣庶関係について、分国支配機構や被官層の動向、さらには幕府との関係をふまえつつ考察した。明徳の乱により動揺した山名氏の同族連合体制は、幕府との関係を重視した時熙によって再整備されており、時熙は、幕府との関係を密接なものとすることで一族守護を統制し、分国支配を安定的に展開することを図った。

これに対し、持豊が惣領の時期の山名氏は、惣領を中心に幕府に対し自立的・主体的に行動することで勢力の拡大を図っており、この傾向は、嘉吉の乱後、顕著になっている。そして、持豊が惣領の時期の山名氏は、惣領が一族・被官を統制するとともに、惣領が所領支配を保障する所領支配秩序の確立に向けての動きがみられ、山名氏一族の分国は惣領・一族の枠組みを越えて複数の分国に関与する被官層を介して、惣領を中心に連結していたと考えられる。

これまで述べたように、守護は、幕府の地方支配の担い手として重要な役割を果たしているが、嘉吉の乱後、自立した地域権力として行動する側面が強く見られる。室町期の守護について理解するには、この双方の側面を重視する必要があるが、守護の分国支配や地域権力としての自立化は多様なあり方がみられるのである。

第三部では、「西国における国人の政治動向と室町幕府・守護」と題し、西国国人の政治動向について考察した。

第一章では「安芸国人沼田小早川氏と室町幕府・守護」と題し、沼田小早川氏の政治動向について考察した。沼田小早川氏は、幕府から地方支配の担い手として様々な政治的役割を求められ行動したが、その動向は政治情勢に応じて時期的な差異がみられる。すなわち、室町前期において、幕府は、守護山名氏を通じて安芸支配を展開しており、奉公衆沼田小早川氏に対する軍事動員や使節遵行についても守護を通じて実施している。しかし、室町後期において、沼田小早川氏は、幕府・細川氏の大内氏対策の担い手として中核的な役割を求められ行動した。そして、細川方と山名・大内方の対立の中で、沼田小早川氏は、安芸国人と幕府・細川氏の関係を仲介するとともに、幕府の地方支配の実現のために細川方の安芸国人と連携して行動している。

第二章では、「備後国人宮氏・一宮と室町幕府・守護」と題し、備後国人宮氏の動向について考察した。備後一宮一吉備津社は、宗教面において一国規模での権威・影響力を有しており、宮氏が有力な地域権力と評価された背景として、吉備津社との密接な関係を指

摘することができる。また、宮氏は、奉公衆として将軍に近侍して行動しており、幕府から地方支配の担い手としての政治的役割を求められ行動した事例がみられる。これらの点から、幕府は、宮氏について、その政治的実力や吉備津社との関係を受けて、守護を通じてではなく直接指揮下に置くことで地域社会の安定を図ったという点を指摘することができる。

第三章では、「伊予国人大野氏と室町幕府・守護」と題し、伊予国人大野氏の政治動向について考察した。室町期において、大野氏は伊予山間部の国人に加え、土佐国人大平氏との関係を形成しており、幕府は、大平氏との関係がみられる大野氏について、予土国境地域の紛争解決能力を有する地域権力と評価し、地方支配の担い手として位置付けている。また、国境を越えて形成された国人間の連携の中で、大野氏は伊予と土佐の関係を仲介する役割を担っており、伊予山間部においては国人間の連携による地域秩序が形成されていたと考えられる。

これまで述べたように、西国国人の政治動向は、幕府の地方支配や地域社会の政治情勢と密接に関連しながら展開されており、室町幕府と守護、国人の関係は、地域性や時代性に応じて様々に変化するものであったという点を指摘することができる。

最後に、結論として、本研究の総括を行った。本論文で明らかにしたように、室町幕府体制下においては、室町殿の上意を中心とする幕府の地方支配と地域権力の動向が、相互に規定しあうとともに密接に関連しており、両者の動きが、地域性や時代性に応じて多様な形で展開することで、政治的安定が実現していたのである。